



# 自分づくりを支える

## B男と私の二年間

吉田 澄江

先日、小学校の公開研究会に参加した。三年生の授業を見た。その中に、幼稚園での二年を共にしたB男の姿があった。授業の中で、友達の意見に共感しつつ、自分なりの意見を述べていた。授業の後、廊下を歩いているB男の肩を後からポンとたたいた。

「あつ、先生！ 来てたの？ 気が付かなかったよー。びっくり」

「元気だった？ 立派に発表してたね」

「うん。でも、あーびっくりした」

そう言いながら、B男はとてもいい笑顔で私の顔を見た。ここに自分は価値ある存在として



だという自信から生まれた余裕が彼全体から醸し出されていた。そして、彼の自分づくりに寄り添った二年間を思い出した。

#### 四歳の頃

—虚勢を張ることで自分を保つ—

入園当初からB男は照れ屋で感情を素直に出せず、悪気はなくても乱暴な行動を取ってしまう様子が見られた。根はやさしく正義感もあるのだが、何かあると口より先に手が出てしまう。また、幼い部分もあつて、はしゃぎ過ぎると誰彼かまわず抱きついたりするようなどころもあつた。何をするかわからないところが近寄りがたい雰囲気を感じさせ、特に同じ生活グループになった女兒は、一緒に過ごさなければならぬお弁当の時間がいやだと涙ぐんだり、登園を渋ったりした。男児の中にも、B男の動きに魅力を感じつつも、

怖がって近づこうとしない様子が見られた。ほかの幼児が怖がるのもっとも部分はあがるが、B男にとつてもこういう自分の表し方が本意ではないと感じた。慣れない環境下で過ごすことへの不安感、自分への自信のなさ等が、他者とかかわろうとするときにも出てしまうのではないか。そこでB男をまずは丸ごと受け止めるかかわりを基本とし、怖がっている子に対してもB男のよさを伝えるようにし、その保護者に対しても、子どもの気持ちを受け止めつつも、一緒に落ち込んだり怖がったりしないで、B男は仲良くなりたくてちよっかいをかけてくるのかもしれないこと、正義感が強いなどいい面もあることを知らせていくことで不安感が取り除けるのではないかと伝え、園でもそのような、視点を変えるきっかけになるかかわりを試みた。

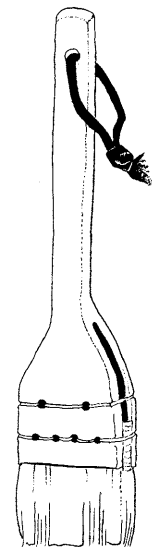
B男を取り巻く子どもたちのB男像を変えると



共に、B男自身が園での安心感を基盤に、遊びが充実していくことで、素直に思いを出すことの心地よさを感じ、また他者にも思いがあることに気づき、お互いに思いが通じ合うことの嬉しさを体験して欲しいと願った。

そんな中、B男を怖がっていたK男の母親が、園の外でもかかわるきっかけを作るなどして、K男が「怖くなかった。仲良くなれた。また遊びたい」と、K男のもつB男像を自ら変容させ、以後、園でも一緒に遊ぶようになった。

B男はぶつかりつつも次第に遊びの中にかかわる相手を増やしていく。B男にとって、K男をはじめとするクラスの何人かに受け入れられたことは、園での生活に安心感をもたらしたようである。新しい環境には慣れにくい面のあったB男が「幼稚園に行きたい」と家で言うようになった。



**\*遊びの楽しさがかかわりを生む（七月）**

共通のイメージが楽しさになって

何日か前に読み聞かせをした『たろうのひっこし』の絵本に刺激を受け、B男、K男、N男、M男らがゴザを抱え、園庭に出て行く。砂場に三枚のゴザを並べ、その上に四人が座り、「たろうのひっこしごっこ！」と笑い合う。何をやる訳でもないのだが、一緒の場にいることが楽しいらしく、とにかく通る人通る人に「たろうのひっこしだよ！」と声をかける。そのうち、砂場用ままだと道具を持ちだし、ごちそうを作り始める。「カレーにしよう！」「ケーキも作ろう！ できたら



先生食べに来てね！」と張り切って作る。

一緒にする心地よさを感じて

片付けの時間。B男、K男、S男が、「子どもたちだけでテール運んだ！」とテラスにいた教師に報告に来る。いつもは片付けだよと言っても絶対やらないB男が興奮気味に目を輝かせている。

「すごい！ それじゃ、これもできる？」と、落ちていた空き箱を渡すと、「できる！」とK男。つられてB男も「できる！」と応じて片付け始める。

一緒に遊んで楽しかった経験を積み重ねていくことで、その後多少のトラブルが発生しても関係を修復してまた一緒に遊ぼうと思ったり、自分の思いどおりではない場合でも、友達の考えたことをやってみたら結構おもしろいことがあると分か

るなど、関係づくりに関して前向きな気持ちを持つようになると思われる。

今まで片付けをしなかったB男が片付けをした背景には、意気投合しているK男と遊びの楽しさを共有し、友達と一緒にのこをする嬉しさが積極的な行動のエネルギーとなったことがあると思われる。

### 五歳の頃

—友達という心地よさを感じて—

他者に対してすぐにはうちとけることのできなB男であったが、年中組の一年間で、少しずつ人とかかわる嬉しさ、楽しさを味わえるようになってきた。とは言え、他者への自己の表し方の一つなのであろうが、B男は年長組になって、叩くなど、相変わらずすぐ手が出るところはあった。しかし、むやみやたらではないことを周りの



子どもたちも認識し、B男自身は手を出すことがよくないことだと頭では分つてきている。また、してしまつた自分の行為について、逃げずに受け止め、自分の心に問い返していくということができるようになつてきた。そんな中で、A男というかけがえのない友も得ることができた。

\*ケンカするほど仲がいい

— かけがえのない存在として思い合う —

A男の母親の連絡帳から（七月）

A男が「今日もB男君とケンカした」と言うので（しかも、いつもA男が泣くというようなことを言い）「一日に一回はケンカするんだ」と言つたときに、「いつもケンカするのにどうしてB男君と遊ぶの？」とわざと聞いてみると、「ケンカするほど仲がいいからだよ！」という答えが返つ

てきました。ウーン負けた、質問の答えは、母の方がうまくありません。（中略）七夕の短冊は先生に書いていただいたそうですね。A男は最初「Bくんのらんぼうがおさまりますように」と書くかと思つたそうで「でもますますやられそうだからやめた」と言つていたので大笑いしました。そつちの方が子どもらしくておもしろかつたな、とひそかに思いました。

この連絡帳を読んで、ケンカしつつもなお、A男はB男をかけがえのない存在として必要としていくということが感じられた。だからこそ、A男の母親のちよつとした意地悪な質問にもはっきり即答できたのだと思う。A男がB男を必要としていくように、B男もまた、A男をかけがえのない存在として大切に思っている。それは、様々な場面での忠告を素直に受け入れているB男の姿から



も窺われた。

また、A男が、一見乱暴者とも思われるB男をこれ程までに受け入れたのも、この連絡帳のように子どものかかわりや相手に対する思い、トラブルまでも「おもしろい」と感じられる母親の支えがあつてこそそのことと思われた。

\*欠席した友達を思う

一人に支えられている自分を感じる――

B男の母の連絡帳から（十二月）

A男君がずっとお休みだったとき、何となく肩の力がないので、どうした、また誰かとケンカしたか？ と聞いたたら、「違うよ、A男が一口寝る前も、今日もお休みなんだよ……」  
それで、A男君に五枚くらい紙をつぶしてお手

紙を書き、ファックスしたことがありました。本当に真剣に書きました。（中略）そんなB男に、心の成長を感じました。そして、確実に人への思いやりの心が育つて来ているのだな、と感じた出来事でした。ふざけんぼで、乱暴で、照れ屋で、なかなか優しい心を素直に表すことができずにいるB男なのに、友達に認められて、思いやられて、親切にしてもらっているうちに、自然にB男にも身につきはじめているのでしょうか。人と人とのかわりつて、本当に大切なことですね。B男共々身にしみます。B男を通しての中で、いろいろな事に感謝の毎日です。





A男の母親からも、B男のファックスのことに

ついての連絡帳が来ていて、誰も自分のことを心配してくれていないのでは……と、具合の悪いのも手伝って気落ち気味のところに、思いがけず大好きなB男からファックスが送られてきてとても嬉しかったこと、お互いあまり文字の読み書きができない子同士が、それでも相手を思いやって文字を綴って送り合ったことについて書かれていた。A男との関係の中で、B男も思いの通じる嬉しさを、これまでに幾度も経験して来たのだと思う。

### 二年間を振り返って

二年間のB男の関係づくりや心の成長を追って、B男が自分で納得しながら新たな事柄や人との関わりを受け入れ、今までの自分を壊しては新たに再生していく姿を見ることができた。そこには不器用ながらも着実なB男の歩みがあった。

た。

幼児期には、一見頑なな幼児に、他を受け入れさせようと無理強いらしりすることよりも、気持ちをほどきながら、場面場面で自分と出会わせ、壊しては再構築する自分づくりに徹底的に付き合うことが大切であると思われる。その中で、自己の可能性も拡大され、それと共に他者をも受け入れられるようになると思われる。

私は、小学校で出会った彼の余裕ある笑顔に、幼稚園でめいっぱい自分のドラマを展開した二年間が、彼自身も気づかないであろう彼の生き方の根っこになり得たことを感じ、感慨を覚えると共に、彼がとてもまぶしく見えた。人を育てることにかかわった者としての、地味ではあるがじんわり大きな喜びであった。

(岩手大学教育学部附属幼稚園)